

岩手山

● 齋藤徳美* ●

○ “いわて” と岩手山

岩手山は南部富士とも呼ばれ、北上川と共に岩手県のシンボルでもある。夏は登山に、冬はスキーに訪れる観光客も多く、また、山麓では小岩井農場をはじめ畜産、農業が営まれている。

山の周辺には筆者を含む30万人以上の住民が生活している。県都盛岡市は山頂から約20kmの至近距離に位置する。深田久弥は日本100名山のなかで、“ひとつ都会に、ひとつの山がこれほど大きく力強く迫っている例は、他にないだろう”と評し、また、宮沢賢治の「グスコブドリの伝記」は彼が何度も岩手山に登った経験から創作されたと思われる。望郷の詩人石川啄木の詩にもまた、ふるさと岩手山への想いがこめられている。東北新幹線が盛岡駅への到着を告げるチャイムとともに、左前の車窓に迫ってくる岩手山を眺められた方も多いことであろう。

○岩手山の概観と噴火史

岩手山の噴火史研究の第一人者である土井宣夫岩手大学教授の研究によると、岩手山の噴火史の概要は以下のとおりである。

岩手山は、富士山と同様、安山岩～玄武岩質の成層火山である。東西約13kmにわたって25個以上の小火山から構成され、正確には「岩手火山群」と呼ばれる。代表的な山として、小畚山・大松倉山・姥倉山・黒倉山・鬼ヶ城・薬師岳（標高

2,038m、山頂）・鞍掛山などがある。約70万年の歴史があるが、約6.5万年前以降活動は西側から東側に移行してきている。過去7回の山体崩壊を起こしているが、この回数は成層火山として国内で最多である。縄文時代以降の活動を次に示すが、西岩手では水蒸気爆発が、東岩手ではマグマ噴火が特徴的である。

① 約6000年前 山体崩壊

東岩手の山頂部で大規模な山体崩壊を起こして、北東山麓を埋め尽くした。土砂の一部は北上川に沿って流下し、盛岡市に達した。

② 約3200年前 西岩手・大地獄谷で水蒸気爆発

③ ①から江戸時代までの間

この間、東岩手で多数の噴火があり、溶岩が流出して薬師岳が形成され、さらに山頂火口の中に妙高岳が形成された。

④ 1686年 東岩手山頂噴火

東岩手山頂の御室火口から生じた大規模の噴火で、マグマ水蒸気爆発に始まり、噴火が本格化して、滝沢村・盛岡市などに降灰があり、火砕サージ・火山泥流が発生した。

⑤ 1732年 東岩手山腹噴火（烧走り溶岩流）

薬師岳北東山腹の5個の火口から溶岩が流出した。

⑥ 1919年 大地獄谷で水蒸気爆発

○1998年噴火危機対応

東北の火山の特徴のひとつは、噴火周期が何百

* Tokumi Saito 放送大学岩手学習センター所長

年と長いことである。岩手山では1998年の春から火山性地震が頻発し、噴火の可能性が指摘されたが、1732年の焼走り溶岩流の噴出以降大きな噴火に見舞われていないため、行政・住民とも生きている火山との認識がなく、当時火山防災体制は皆無の状況にあった。

東北大学の既設の定常観測点4カ所に加えて、気象庁・東北大学・国土地理院などが臨時の観測点を設置、観測を強化し、噴火していない火山としては最大レベルの監視体制が敷かれた。

一方、活発な産学官連携活動を行っていた岩手ネットワークシステム（INS）の実績をもとに、「INS 岩手山火山防災検討会」が立ち上げられ、公的な防災対応を先導した。短時間で「岩手山火山防災マップ」、市町村ごとの「岩手山火山防災対策図」、全国初の火山防災指針となる「岩手山火山防災ガイドライン」が策定され、住民説明会、避難訓練などの対策が急ピッチで展開された。

住民を主体に位置付け・研究者・行政関係者・報道機関が使命感を持ってスクラムを組み地域の安全を守る「減災の四角錐」の火山防災体制は、「岩手方式」とも称される。地域が連携した火山防災の一つの「かたち」が示されたともいえよう。

○現在の火山防災体制

1998年の噴火危機は、西岩手での噴気活動が活発化したが、幸いに噴火に至らず、このたびの活動は沈静化したと考えられている。臨時の観測機

器は撤去され、東北大の5カ所の地震・歪・傾斜計などの定常観測点、気象庁の2カ所の地震観測点、1カ所の監視カメラ、国土交通省の監視カメラなどが山を監視している。「岩手山の火山活動に関する検討会」が防災ヘリコプターによる監視と活動状況の検討を継続実施、INSの検討会も定期的に開催されるなど、平時の最低限ともいえる体制はどうか維持されているが、研究費の削減や意識の低下の中でその継続は容易ではない。

岩手山の砂防

岩手山では、東北地方整備局岩手河川国道事務所により1990年より直轄火山砂防事業が実施されている。1998年の噴火危機の際は、直轄事務所と岩手県が連携して砂防対策を実施した。1998年7月には、土石流等の影響範囲の想定により火山防災マップの作成を支援したほか、山麓に監視カメラ、土石流検知センサー等を設置して市町村等へ情報提供するなど、警戒避難に資する支援を実施している。1999年6月には、降灰後の土石流や溶岩流等を対象とした噴火対応火山砂防計画が策定され、各機関により施設整備が進められている。2000年6月には、噴火時の防災拠点及び平時の情報発信拠点として岩手山火山防災情報ステーション（通称：イーハトーブ火山局）が設置された。また、2002年1月には、火山災害に対しては全国初となるロールプレイング方式の防災訓練が実施された。2004年7月には、活動の沈静化に伴い入山規制が緩和されたものの、現在、噴火時の緊急対策の具体的な検討に基づく火山噴火緊急減災対策砂防計画の策定が進められている。

（国土交通省砂防部）